

説 教「起きよ」

イザヤ 43:19-20 ルカ 8:40-42, 49-56

2023. 1. 22

ユーカリが丘教会牧師、八街西伝道所代務者、仙川教会代務者(申請手続き中) 大串眞
わたしたちは、重い病や死という現実突然向き合うことがあります。徐々に時間をかけてという場合もあれば、突然、全く予期せぬ仕方で、強盗が襲いかかるようにこのような現実に向き合うこともあります。言葉を失ってしまいます。頭がぼうっとして、現実なのか、夢を見ているのかわからなくなってしまいます。また、個人的な病とか死ということだけではなく、今日、わたしたちが過ごしている時代そのもの、戦争が現実に行っていたり、また、コロナ禍というような疫病が続いていたり、どう受けとめてよいかわからないような、得体のしれない者に襲われているような中、なんとかかんとか、日々を生きているのかもしれない。

今日一緒に読んだ聖書の中には、そんな厳しい現実襲われている人が登場いたします。カファルナウムという聖書の舞台上、会堂司をしているヤイロという人物です。会堂司というのは、ユダヤ人のコミュニティでは一定の地位のある人を指します。ユダヤコミュニティのリーダー的存在で、ユダヤの会堂すなわちシナゴークとの責任者になっています。ユダヤの会堂・シナゴークは、コミュニティにとっては宗教的な大切な礼拝場所でありましたし、小さな裁判をはじめ、教育的なこと、ありとあらゆるコミュニティの中心でありました。その会堂司には、誰もが輪番でなれるというのではありません。人々から信頼され、またユダヤにとっては祝福のしるしとして裕福であることなどの条件もあり、その土地の名士的な存在であったのです。若くして会堂司となったヤイロはある意味人生の成功者でした。彼には、一人のお子さんがいました。12歳になる一人娘です。ところが、その娘さんが死にかかっているところから、この話は始まりました。会堂司であるヤイロ、ユダヤ人の中では名誉職のような立場になって、何もかもが満たされた家庭に病と死という大きな出来事が襲いかかったのです。このルカによる福音書だけが、一人娘であったことを伝えています。それだけ悲しみが大きかったことを伝えています。またそれだけ主イエスが、悲しみの家や人に寄り添われる方であるか証しされています。

ガリラヤ湖畔の漁師町、カファルナウムの会堂で、主イエスが宣教され、癒しの奇跡をされていたことを恐らくヤイロは目撃していたことでしょう。この頃までに、ユダヤ人の宗教であるユダヤ教と、主イエスとは対立し、緊張があったとされています。会堂司という立場上は、主イエスに頭を下げて願い事をするのは、まずかったと思われる中、ヤイロは、一人娘のために、周囲の人々の声や目にかかわらず、主イエスの前にひれ伏して必死に懇願するのです。メンツとかプライドとか言ってもらえない。それほど厳しい事態でした。「娘が死にかかっています。どうぞ主よ、助けてください。」と。

主は行動を共にされます。彼の家、娘のもとに急ぐのです。しかし、そこに、前回取り上げたのですが、長年婦人病の一つで血が止まらない女性があらわれ、主イエスの衣の裾をつかむことで癒しの力を引きだしたというエピソードが加わります。主イエスは立ち止まって、この女性とのやりとりをします。その間会堂司ヤイロは、やきもきしたでしょう。しかし、忍耐して、一行が動き出すことを待ったのです。

そして、今日のところまで。そこに知らせが入りました。娘さんが亡くなったという知らせです。その使いの者は言いました。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わ

すことはありません。」ここで、ヤイロは発言していません。恐らく言葉を失ってしまったのではないかと思います。「なぜもって早く来てくださらなかったのか。なぜあの衣に触って癒された女性を無視して、先に進んでくれなかったのか。」そんな恨みつらみもあったでしょう。しかし、事実、娘さんは、死んでしまった。そこには、まだ言葉にならない喪失感と悲しみと、絶望と、今後は一体どうなるのかという恐れがあったことでしょう。主はおっしゃいます。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば娘は救われる。」さあ、ここからは、主イエスが会堂司の家に着き、側近の弟子たち、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴って、亡くなった娘と父母だけが家の中に立ち会いました。家の周囲には、ユダヤ社会では葬りの習慣である泣き女たちが、悲しみの声を上げていました。ほかの人々もいたでしょう。その人々に向けて、「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ。」と主は宣言なさいました。人々は嘲笑いました。眠っているのではなく、事実死んだのだと人々は思ったことでしょう。主イエスの言葉が無力で、虚しい言葉のように響いたから嘲笑ったのです。しかし、そうではなかった。ここでは主イエスの言葉の力が強調されています。主イエスは、娘の手を取って「娘よ、起きなさい」と呼びかけると、娘は生き返り、すぐに起き上がって、元気になったのです。主は、何か食べ物をあげなさいと指示をなさいました。これは、家族に対する配慮です。家族として、共に食事をする。そのように娘さんを死者の国から帰してくださったということです。

主イエスはこのことを誰にも話さないようにと伝えました。しかし、おそらくかえって、人々に広まっていったことでしょう。そして最終的には、聖書に残ったのです。マルコによる福音書では、実際に主イエスが語ったであろう、「タリタ・クム」「娘よ、起きなさい」というアラム語まで聖書に残っています。

さて、この出来事は、ただそのような奇跡の出来事を伝えているわけではありません。主イエスは、病をいやし、死者まで甦らされたという奇跡物語を語るということは表面的なことです。わたしは、今、地域のコミュニティーセンターで聖書カフェをしているのですが、ちょうど先日の時に、福音書の中での主イエスの教えや、奇跡の数々について学んだところです。そこでこんなことを言いました。イエス様のことが書かれている箇所を読む時に、ただ素晴らしい教えがあるとか、不思議な奇跡を行われたというふうに読んで、表面的にしかわかりません。これらはみんな主イエスの十字架と復活という救いということと重ねて読む時に、わたしたちにリアルに迫って来るものです。福音書とはそのように読むように書かれているのです。そうお伝えしました。つまり、今日のところも、主イエスの十字架と復活の救いと重ねて読む時に、わたしたちの置かれた現実の中で、神様が直接、わたしたちに語る御言葉として響きます。そして、その権威ある御言葉と共に、主イエスがわたしたちに寄り添ってくださっていることに気づくのです。

つまり、こういうことです。わたしたちが、悲しみに覆われて、言葉を失っているところで、この先どうしたらいいだろうかと不安や恐れを抱いているところで、あるいは、絶望しているところで、主は今こう語っておられる。「恐れるな。ただ信じなさい。」御言葉によって、わたしたちを励ましてくださっているのです。御言葉が、わたしたちに与えられているのです。

そして、「娘よ、起きなさい」タリタ・クム。これはわたしたちの教会に、またわたしたち一人一人に語られている御言葉です。そして、主は寄り添ってくださっているのです。

直接的に文字通り、病が癒され、死人が生き返って立ち上がるという意味にとる必要はないでしょう。十字架の死を通られ、死人のうちから復活された主が、その復活のいのちと希望をもって、「娘よ、起きなさい」タリタ・クムと呼びかけてくださっているのです。

みなさん、これは、主のみもとで眠っておられるわたしたちの愛する者と、再会をする希望と言ってもよいでしょう。わたしたちの将来の望みです。しかし、それは、必ずしも将来のこと、遠い将来のことだけでなく、今、これからという意味も含まれています。わたしたちは、主御自身が、復活のいのちについて宣言のように語った言葉を合わせて聞くことがゆるされているでしょう。ヨハネ 11:25

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

死んでも生きる。将来の希望だけでないです。主を信じる者は誰も決して死ぬことはない。つまり、今から、永遠のいのちに生きるという約束です。

タリタ・クム。起きよ。それは、今から、この永遠のいのちによって生きるということです。わたしは、わたしたちは、このいのちによって立ち上がっていくことができる。

「恐れることはない。ただ信じなさい。」「起きよ」タリタ・クム！

今日の説教は、ユーカリが丘教会だけでなく、仙川教会でも代読で読まれることになっています。わたしにとっては、兄ですが、仙川教会の牧師である大串肇牧師が、突然病で倒れ、奪い去れるように亡くなりました。先週 15 日のユーカリが丘教会定例役員会で、仙川教会の代務者の要請を承認しました。正式な手続きはこれからですが、ユーカリが丘教会としても共に歩んでいくこととなります。このことは、代務者を送り出す教会も、受ける教会も、ある意味で試練です。この先どんなことが待っているのか。いろいろ思うところがあるでしょうが、御言葉をいただいていることは確かです。この御言葉は権威あるみ言葉です。御言葉が発せられるならば必ず新しいことが起こる。御言葉とはそういうものです。御言葉と共に主が寄り添ってくださいます。主の御手が触れて、起き上がる。そのように導かれることを希望として歩んで良いのです。

最後に、仙川教会で私も兄も子どもの教会の教師をしていましたが、子どもの教会の説教で、兄はイースターの時だったか子どもたちにこんなことを言っていました。「みなさん、イエスさまが、復活されましたから、ファイト——発一、元気ハツラツ！」ちょっとおふざけが入りましたが、当たっていると思いました。その頃青年会で、キラキラして元気ハツラツとした兄を思い起こします。復活のいのちとは、そういうことでありましょう。祈ります。

主なる神様、本日の説教は、ユーカリが丘教会と仙川教会共通でありました。十字架と復活の主が、悲しむ者に寄り添ってくださいます。行き詰る者に権威ある御言葉を与えて、前に進ませてくださいます。そのままでしたらわたしたちは、悲しんで振り返ることばかりになってしまいます。しかし、主のいのちと希望によって、前に向かって歩んで参ります。主よ、どうぞ、あなた様の命で歩ませてください。わたしたち一人一人を、悲しみに満ちた家を、教会を、立ち上がらせてください。

この祈りを主の御名によって、み前におささげいたします。アーメン